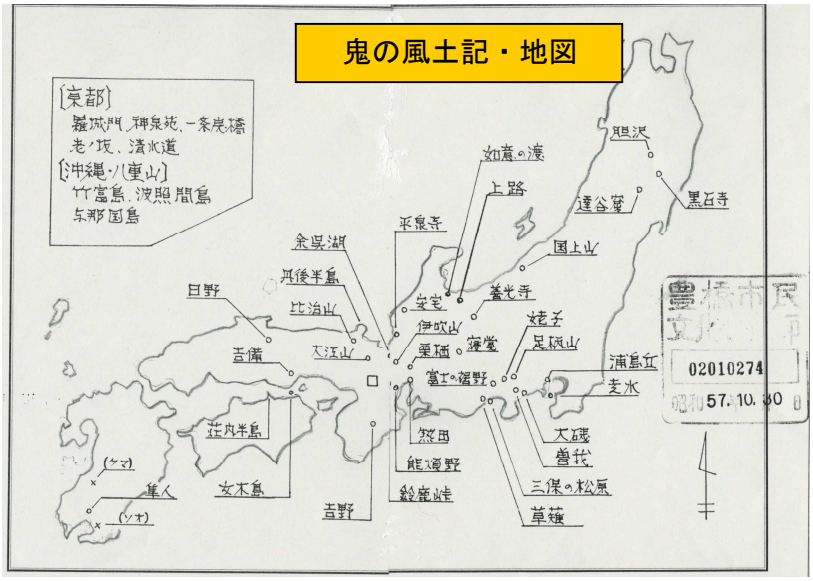

服部邦夫著『鬼の風土記』創林社刊

鬼って何？

節分の日。豆まきと「福は内！鬼は外!」の声が家々から聞かれる。豆とともに家の外へ追い払われる「鬼」。鬼って何？

鬼の多くは、赤ら顔・頭に角・虎柄のパンツをはいている。これは一体どこから来たのか。

『山海経』の妖怪
羽田八幡宮文庫蔵

鬼は、隠から

最初から、鬼のイメージがあったわけではない。はじめは、恐ろしいものだが、形のないもの、隠れていて人に災いをもたらすものとして「隠」の文字がつかわれた。

現在の鬼は、およそ1000年前ごろに作られたといわれている。お伽草紙の『一寸法師』『桃太郎』などの鬼や、『酒呑童子』で鬼のイメージが固定され、諸悪の化身たる鬼の怖さがクローズアップされた。また、「鬼門」の「丑寅」の方角から「丑」、即ち「牛」の「角」を、「寅」から「虎柄のパンツ（ふんどし）」が考え出された。

追儺から節分へ

『地獄絵』豊田市・長慶寺蔵

平安期の物語『日本霊異記』『今昔物語集』『源氏物語』には、もののけや鬼を追い払うために加持祈祷する修験者や陰陽師・方相師が登場する。彼らは、退魔の呪術を行う専門職であった。

中央（京都・奈良）寺院で行われる正月の修正会・修二会で、病気や不安・タタリ・悪霊のもと、悪の化身「鬼」を追い払う「追儺」の儀式が、現在の「節分」行事に変わっていった。「追儺」は、専門の呪師方相師が4つ目の赤い奇妙な面をかぶり「鬼」を追い払った。追われる鬼の役を演じたのが、舎人。後に猿楽師に変わった。

修正会・修二会の芸能化

平安後期、修正会・修二会終了後、芸能者を招いて宴が行われた。

猿楽師の演ずる滑稽で大げさな振りを見る楽しさは、地方に伝播するにつれ、住民を喜ばせることに重きを置くようになった。その結果、田楽や猿楽が流行していった。